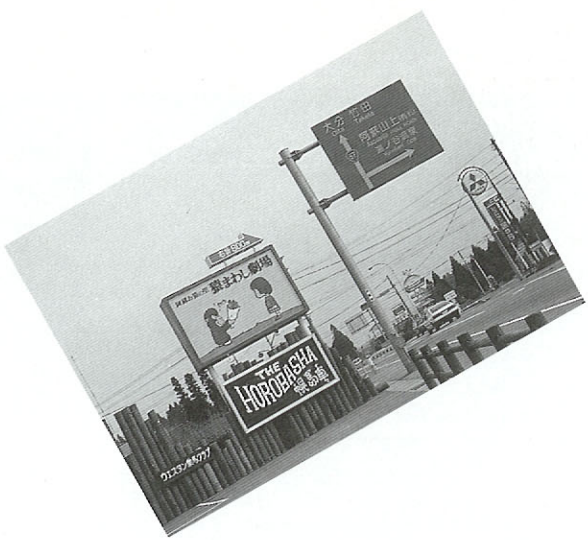


古くから縁日などで子供達に親しまれてきた猿まわし。このわが国古来の伝統芸能の世界に飛び込んだ一人の女性がいる。甲佐町出身の若木みどりさん(26)。3月26日、長陽村にオープンした『阿蘇お猿の里』の女性調教師だ。



「昔から動物が好きだったんです。それに大勢の人との触れ合いも大好き。昨年の春、阿蘇にこの施設ができると聞いて、居ても立ってもいられなくなっちゃって。熊本市内の会社をやめて、思い切って飛び込んだんです。」

『お猿の里』は山口県に本拠地を置き、今や全国的な人気を誇る『周防猿まわしの会』(代表・村崎義正会長)が作ったわが国初の本格的な猿まわし劇場。若木さんは一月下旬から住み込み、コンビを組む雄猿の『じゅん』と共に猛練習を重ねてきた。

「猿は自分がパートナーと認めた人間の言う事しか聞かないんです。つまり、『じゅん』が私を信じ、私が『じゅん』を信じなければ、芸は出来上らない。私がちよつとでも迷ったり、弱味を見せたりすると、敏感に気付いて言う事を聞かなくなるんです。そうなることはわかっていても、始めのうちはやっ



ぱり、おろおろしてしまつて…。『じゅん』がせっかく伸びようとしてゐるのに、私の方がついていけないんです。そんな自分が情けなくて、涙を流した事が何度もありました。」
練習の様子を毎日克明に日記に付け、どうしたらうまくやれるかを一生懸命に考えた。そうすることで、涙は消えていった。

見に来てくたやう。『じゅん』と私のベスト・フレンズ。

若木みどりさん

「言う事を聞かない時には、力づくで押さえつける事もありますよ。叱る時はビシッと叱り、誉める時はちゃんと誉める。メリハリが大切なんです。納得しないと動きませんから。」

体中に残るひっかき傷や噛み傷が、『じゅん』の抵抗の激しさを物語っている。
「エサや電気ショックを使って覚えさせていく芸とは、根本的に違うんです。ロボットみたいな芸じゃなくて、猿自身芸を見せる喜びを知っている。お客さんが拍手すると、猿も得意そうな態度を見せるんです。表情が、実にイキイキしています。芸を通して秘められた能力を精一杯引き出し、猿としての

命を輝かせてあげたい。そう思うと、練習もつらくなくなるんですよ。」

千年の歴史を誇りながら消滅状態にあった猿まわしを村崎会長らが復興させて10年。若木さんは復興後初の女性調教師になる。それだけに、他のメンバーから寄せられる期待も大きい。
「入門希望者はこれまでに、20数名いたが残っているのは8人。それぐらい厳しい世界なんです。でも、彼女の決意は違っていた。これなら大丈夫だと思つて、入門を許したんです。予想以上にうまくやってくれますね。これから何度も壁に突き当たるでしょうが、くじけずに乗り越えてほしいと思います。」

園長の村崎三吉さんの言葉には、彼女への温かい愛情が感じられた。
「私がやれたということになれば、後に続くとする女性達の励みになると思つています。そのためにも、私ずつとがんばり続けたい。皆さん、応援してくださいね。」

